

# S君 47年目の告白

「わが蒸発始末記」後日譚

庄司 勉

井上ひさしさんのエッセイ集に『わが蒸発始末記』（中公文庫）という一冊がある。このエッセイ集が、ある少年の人生を決定づけた…という秘話を紹介したい。

時は、昭和48年10月。超売れっ子作家は、歯痛に苦しみながら、山形市での講演会をこなし、帰京すると、一枚の葉書が舞い込む。差出人は山形市に住むS君という高校1年生だった。この葉書を受け取って数日後、井上さんは「蒸発」する。歯痛の鎮痛剤で朦朧状態となり、迫りくる締め切り地獄から逃れるため、ホテルにしばし雲隠れしただけなのだが、その顛末とお詫びの文章がこのエッセイである。

さて、S君は葉書にいったい何を書いていたのか…。井上さんは、同エッセイで彼の葉書の大略をこう引用している。  
「ぼくは直木賞を狙っている文学少年ですが、直木賞作家であるあなたの講演がつまらなかったのがっかりです。わが校の自治会長のほうがずっと聞かせます。ぼくは今後あなたの作品を読むことはやめ…」。

文学少年を大いに失望させるほど講演がひどかったのだ。

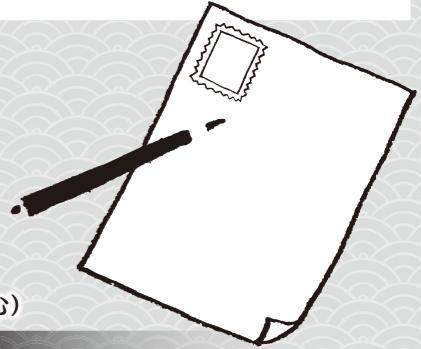
このエッセイが掲載された「週刊朝日」をS君は後日、学校の図書館で読み、衝撃を受ける。自分の葉書が井上さんを追い込み、「蒸発」事件の引き金になったのではないか…。純朴なS君は当時、本当にそう思ったらしい。

しかし、それ以上に、彼の心を激しく揺さぶったのは、井上さんが要約した形とはいえ、自分の葉書の文面が「週刊朝日」に掲載されたという事実…。当時、「週刊朝日」は発行部数が50万部をはるかに超えていたはず。作家志望のS君にとって、いわばマスコミデビューとも言える「事件」だったのだ。

この週刊誌の一件で、井上さんを心の師と仰いだS君は、その後も井上作品を読み続け、テレビ番組を製作する仕事に就く。S君のドキュメンタリー番組に戦争被害者や昭和史に目を向けたものが多いのは井上作品の影響に他ならない。

47年前の講演会の際、井上さんは歯痛を押してサイン会に応じ、S君の色紙にこう記した。  
「大きな船は大きな航海をする」

S君は大きな船には乗れなかったが、井上さんの偉大な航跡を追って、今も懸命に小船を漕いでいる。



庄司 勉 (しょうじ・つとむ)  
テレビ局ディレクター

井上ひさし研究会会員。山形県出身。大学卒業後山形テレビに入社。報道記者を経て番組制作ディレクター。主な作品：1999年「その時、私は14歳だった～戦時下の性暴力と心の傷～」(第37回ギャラクシー賞選奨)。05年「妖怪を見た男～近代建築界の巨人伊東忠太の世界～」。16年「希望の一滴～希少難病に光!ここまで来た遺伝子治療～」(第13回日本放送文化大賞準グランプリ) など。



## イツセーさんをみたい!

鈴木 朗子

出先から戻るとプラザ会報のコラム「My favorite things」への寄稿依頼のメールが届いていた。「私が?」と驚き疑ったが間違いではないなさそうだ。一晩考えた。お断りをするのもできたが、自身に向けられたチャンスはできるだけ活かしたいという好奇心と、とある絶妙なタイミングで私の心を動かした。

この日、私はある演奏会の進行役を務め、演奏者と共に舞台に立った。演目は「サウンド・オブ・ミュージック」。60年の歴史ある作品を、市民団体による吹奏楽、合唱、ダンスを交えた合同ステージで上演された。数々の名曲を紹介してきたばかりであった。「My favorite things」(私のお気に入り)もこの映画の中の有名な一曲。これは何かの偶然に導かれている

のだろうと思うことにした。

さて、本題は「お気に入り」。出会いはここフレンドリープラザ。イツセー尾形さんの一人芝居を鑑賞したその日から、ずっと好きな俳優さんである。山形や仙台の公演は欠かさず見てきた。ここ数年は画面の中で活躍する姿を見ては、その役とは別に本人の素顔や人柄が思い起こされ、クスツとうれしく思うことがある。

朝ドラでの好演もいいが、またプラザをはじめとする山形の芝居小屋で、イツセーさんのほとぼしる汗と名演を肌で感じ取られる日が来ることを望んでいる。  
(エフエムNCV/川西町)

## だんぜんギターだ!

松山 薫

好きなことはたくさんありますが、最も長く続けているのはギターです。

突然ギターを弾きたくなったのはグループサウンドの熱が少し落ち着いて、フォークソングが流行し始めるころでした。必死に月給3000円の新聞配達をして13000円のモーリスを買いました。

深夜ラジオを聞きながらギターの練習をした高校1年生。教則本もなく毎日ドレミファソラシドを弾いているうちに「音楽で習った和音が弾けるかも?」と思ってドミソと押さえて弾いてみました。聞き慣れた和音が自分に弾けるようになったときは感動しました。勢いに乗ってレファラ、ラドミ、シレソなどと音を探しながら押さえてみました。

後にこの押さえ方にCとかDmとか名前があると知りました。「ギターなんか弾いてないで勉強しなさい」と言われながら、雑誌の付録の楽譜とコード表を見ながら、ラジオから流れる吉田拓郎や歌謡曲を手本にしたがながら練習でした。

高校、大学とライブやコンサートをずいぶんやりましたが、卒業後はクラシックギターに転向し、独奏をメインにリコーダーやマンドリンの伴奏もしました。

30年程前に全日本ギター音楽コンクールに出場して銅賞をもらったのをピークに演奏は下り続けて、最近はその横好きになり、今はボケ防止に役立ちそうです。

(元地域おこし協力隊・農業/川西町)

